

# 社会科部会

部会長：附属高等学校 飯島裕希  
部会員：附属小学校 岩坂尚史・片山元裕・山賀愛  
附属中学校 寺本誠  
附属高等学校 山川志保  
大学 大脇和志

2023 年度活動報告：

## 社会科における「対話による学び」と小中高大連携

社会科部会は、2012 年に発足して以来、「社会的ジレンマ」や「社会的論争問題」を通して児童・生徒の見方・考え方や自身の判断基準を深める社会科授業のあり方について研究を進めてきた。2022 年度からは、本学にコンピテンシー育成開発研究所が設置されたことを機に「学びに向かう力」を研究テーマに据えた。2023 年度は、これまでの研究を引き継ぎつつ、「学びに向かう力」の一環として「対話による学び」をテーマに加えて研究を行った。

月に 1 回 16 時 30 分から 18 時頃まで、附属高等学校にて実践交流を進めたほか、公開研究会等の機会を活かして互いに授業を参観し、児童・生徒の対話による学びへの理解を深めた。附属小 3 名、附属中 1 名、附属高（地理歴史科・公民科）2 名、大学教員 1 名、そして筑波大学附属中学校教員の参加機会も得て、学校種を越えた連携・交流を進めることができた。

附属小学校からは、学級のルールを問い直す授業やリニア中央新幹線と向き合う学習指導案が提案され、児童が身近な社会を捉え返したり、実社会の課題に児童が主体的に関わったりする契機等について議論した。詳細は、お茶の水女子大学附属小学校第 86 回教育実際指導研究会発表要項（2024）を参照されたい。

附属中学校からは、アフリカの今を捉える地理的分野の単元案が提案され、社会認識をグローバルに広げる手立てや留意点等について議論した。貧困や紛争の学習だけで終えるのではなく、人口増加率が高く中位年齢も若いことから、経済成長への期待や変革の勢いなど現在のアフリカに意識を向けるものである。この単元案について、「アフリカ」のどこを切り取って焦点化するか、また誰のためのアフリカの経済成長か等の論点について議論した。

附属高校からは、2022 年度より始まった高校新課程を踏まえて、「歴史総合」の学びや「総合的な探究の時間」の授業事例が提案され、歴史を通じて現代社会を問うことや小中高の学びの結びつきと深まり等について議論した。「歴史総合」の学びの詳細については山川志保「生徒が描き出す〈歴史総合〉」『歴史学研究』1032（2022）、山川志保「『歴史総合』で培う力～『歴史総合』を生徒はどう感じ、どのような力を身に付けたのだろうか～」『お茶の水女子大学附属高等学校研

究紀要』第 68 号(2023)を参照されたい。また、附属高校における「総合的な探究の時間」の学びについては、朝倉彬・飯島裕希・山川志保「知の統合をみとる—3年必修授業:持続可能な社会の探究(総合的な探究の時間)—」『お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要』第 68 号(2023)を参照されたい。

相互に検討した小中高の授業事例は、いずれも対話的な授業実践であり、生徒同士の対話、教材との対話、自分との対話が重層的になされる中で、生徒の社会認識が深まっていくことが確かめられた。また、附属小学校において話し合いの構えを持っている子が育っていることが、中学・高校での対話的な学びの土台となっているという認識で一致した。附属中学・高校ともに、生徒が意見を言ったときに、批判はあっても聞いてもらえるという教室の雰囲気醸成できているが、それは小中高と一貫して個性と対話を重視する附属学校園の教育の成果と言えると思う。

社会科において、「〇〇と私たち」という単元の設定はしばしばみられるが、「私たち」とは何だろうか。学級のルールという身近な課題を考える際にも、児童だけでなく先生は含まれるか、児童によって認識が異なるだろう。社会課題においては多元的な集団が関わり合うものであり、地域住民、国民、地球市民といった概念の外延と内包についても児童・生徒の認識は多様だろう。そして、「私」を抜きにして「私たち」はうまれるのだろうかという課題もある。公共的な判断は大切だが、自分を度外視した判断は「きれいごとの練習」になりかねない。「対話による学び」を通じて他者を知り自己を知ることは、社会を構成する諸事象を捉え、公共的な判断を行う上で欠かせないと思う。対話は、学びのプロセスであると同時に、対話を成り立たせる力は「学びに向かう力」の重要な構成要素であるだろう。

前年度の本部会では、社会科における協働的問題解決学習で育成できる資質・能力として、「批判的思考力」「課題生成力」「意思決定力」「協働的思考力」「社会参画力」などが話題にのぼった。今年度の部会では、これらに加えて、対話を成り立たせる力と対話によって形成される認識や判断力について考えを深めた。現時点では、これらの力の定義や関連性、他に養うべき力の有無など、まだ十分な検討・整理はできていない。来年度以降、引き続き各校園の実践報告を積み重ね、「学びに向かう力」を育てるための授業デザイン・カリキュラムのあり方、またそれを支える資質・能力をどのように定義し、位置づけるか検討を進めたい。